

「コミュニケーション英語」におけるリーディング力の育成

Reading Proficiency in "Communication English"

英語科 瀬戸口 亜希

<要旨>

「コミュニケーション英語」では、より多くの語彙がインプットとして与えられる。外から見えない生徒のリーディング・プロセスをどの程度信頼できるか、またそれらをどのように確認するか。自力で読む力を育てると同時にコミュニケーション型の授業を展開するための条件について考える。

<キーワード> コミュニケーション リーディング オーラル・イントロダクション 未知語 語彙力

1. はじめに

1.1. 教科書の変化

2013年度より高校における新学習指導要領が施行され、これまでの「英語Ⅰ、Ⅱ」に代わって「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ」が始まった。英語で英語を教えること、4技能をバランス良く身につけさせる指導がより重視されるようになった。

中学では2012年より新課程に移行した。高校2年生(2015年現在)は2014年3月に中学校を卒業している。旧課程での中学卒業時の新出単語数は900語とされていたが、新課程でのそれは1200語である。つまり生徒たちは、中学1年生の間は900語習得を目標とした教科書で学んでいる。ところが高校に入ると1200語を習得済みであることを前提とした教科書を使うことになる。

このような中で生徒たちは高校1年生からの英語学習を開始することになるが、1レッスンあたりの語数と新出語数の多さには戸惑いを隠せない様子である。教科書の厚みは増し、これまで写真やイラストが占めていた面積は大きく縮小される。

教科書に見られる大きな変化のひとつは、各レッスンのテーマに関連した多読・速読用教材が教科書後半に用意されていることである。扱いは学校によって異なるだろうが、より多くのインプットが期待されていることが分かる。

高校2年生になると、新出語の数に大きな差が見られる。旧課程では500語だった新出語が新課程では700語にまで増える。レッスンによっては新出語の数が90語に達するものもある。

参考までに、使用している教科書Genius(大修館書店)で扱われている各レッスンあたりの新出語と総語数の比較をしてみた(図1, 2)。(いずれもテーマに関連した多読用の教材については省略している。)総語数につ

ては大幅に増加しているのが明らかである。中学—高校間のギャップはさらに大きくなる。ともすれば英語嫌いを生みだしかねない状況である。

図1 Geniusにおける語彙数の比較

| | 現 | | | 旧 | | |
|-----------|-------|-------|-------|------|-----|---------|
| | E.C.Ⅰ | E.C.Ⅱ | E.C.Ⅲ | 英語Ⅰ | 英語Ⅱ | Reading |
| Lesson 1 | 34 | 62 | 43 | 27 | 48 | 74 |
| Lesson 2 | 37 | 85 | 47 | 39 | 53 | 90 |
| Lesson 3 | 49 | 90 | 68 | 35 | 32 | 72 |
| Lesson 4 | 43 | 29 | 47 | 47 | 38 | 91 |
| Lesson 5 | 31 | 46 | 36 | 33 | 48 | 73 |
| Lesson 6 | 37 | 82 | 45 | 26 | 67 | 78 |
| Lesson 7 | 41 | 60 | 55 | 47 | 44 | 73 |
| Lesson 8 | 48 | 79 | 62 | 34 | 45 | 56 |
| Lesson 9 | 45 | 41 | 51 | 32 | 56 | 70 |
| Lesson 10 | 30 | 62 | 72 | 36 | 52 | 83 |
| total | 395 | 636 | 526 | 356 | 483 | 760 |
| | 1557 | | | 1599 | | |

図2 Geniusにおける総語数の比較

| | 現 | | | 旧 | | |
|-----------|-------|-------|-------|-------|------|---------|
| | E.C.Ⅰ | E.C.Ⅱ | E.C.Ⅲ | 英語Ⅰ | 英語Ⅱ | Reading |
| Lesson 1 | 466 | 682 | 1003 | 483 | 610 | 782 |
| Lesson 2 | 633 | 985 | 989 | 535 | 716 | 868 |
| Lesson 3 | 687 | 925 | 1027 | 412 | 562 | 932 |
| Lesson 4 | 682 | 973 | 975 | 776 | 795 | 867 |
| Lesson 5 | 756 | 1034 | 1008 | 495 | 976 | 995 |
| Lesson 6 | 794 | 1051 | 1113 | 717 | 893 | 899 |
| Lesson 7 | 713 | 1005 | 1121 | 656 | 883 | 1122 |
| Lesson 8 | 807 | 1075 | 1229 | 502 | 1041 | 849 |
| Lesson 9 | 761 | 1012 | 1205 | 843 | 863 | 1128 |
| Lesson 10 | 916 | 1005 | 1216 | 894 | 1105 | 1050 |
| total | 7215 | 9747 | 10886 | 6313 | 8444 | 9492 |
| | 27848 | | | 24249 | | |

1.2. オーラル・イントロダクション

英語を使って新出語を導入したり、テキストの内容を説明したりする場合、考えられる手段の一つとして、オーラル・イントロダクションがある。オーラル・イントロ

ダクションとは、文章を読む前に内容を簡単に英語で説明し、同時に文章内で扱われている新出語を導入するものである。すべて英語で導入される上に教師の発する問いに対して生徒が答える場面が多くあり、コミュニケーションな授業づくりにはたいへん有効な方法である。中学、高校においては「英語の授業は英語で」となると、オーラル・イントロダクションが好まれる傾向がある。

しかしながら、これほど多くの新出単語が含まれた長い英文を、オーラル・イントロダクションを通じて導入することは可能、あるいは適切なのだろうか。また、英語を学び始めて既に3年以上が経過する高校生の学習者にこの方法は効果的と言えるのだろうか。

オーラル・イントロダクションで教師がいわば「噛み砕いて」教えた後に生徒は初めて教科書を開いて文章を目にするが、これが本当に「読んでいる」ことにつながるのかという疑問が浮かび上がってくる。オーラル・イントロダクションは、例えるならリーディング・プロセスにおける補助輪のような役目を果たしている。その補助輪が外れないまま、英字新聞やペーパーバックなどにある長い文章を目の当たりにしたとき、生徒たちは自力でそれらを読むことができるようになっていくのだろうか。リーディングのプロセスは、ライティングやスピーキングのそれとは異なり、目に見えない。読むスピードや理解度は客観的に測ることが難しい。また、読む過程において生徒がつまづいているとしたら、その原因が文構造なのか、未知の単語なのかも教師の側からは把握しにくい。

実生活において、どの言語であれ読むという行為にはそういったつまづきは少なからず存在する。それにもかかわらず、読み進めることに違いはなく、さらにその文章が全体で何を言わんとするかを、多かれ少なかれ、脳はつかもうとしている。通常のリーディング活動において「補助輪」はほぼ存在しないのである。

1.3. 「コミュニケーション英語」における

「コミュニケーション」

「コミュニケーション英語」の授業では、その名の示すとおり、コミュニケーション活動が必須である。言われたことを聞き取り、自らの考えを自分の言葉で伝え、英語を使って意思疎通をする力が求められる。リーディングのみならず4技能すべてのバランスの取れた習得が目指される。生徒がじっと席について、講義をただ静かに聞き続ける形式の授業にはコミュニケーションは存在し得ない。

しかしながら多くの新出語と長い英文を扱う場合、授業でもっとも時間を割かれる傾向にあるのが、単語の意味確認と内容理解、文構造の解説である。ともすれば生徒—生徒間、生徒—教師間のコミュニケーションは失われてしまう状況にある。

2. 目的

これらの現状をふまえ、以下の点を重視し授業を実践した。

2.1. 自力で英文を読める生徒を育てる

英文を読む前にあらかじめ未知の単語を全て教えたり、内容を分かりやすくまとめたりしてあげるだけでは、生徒が自力で読めているのかが分からない。「読めた気」になっているだけかもしれない。その場合、自力で英文が読める力は育てられていない。教師の目に見えていない個人のリーディング・プロセスを信じ、授業の中で伸ばしていくことは可能である。

2.2. コミュニikatイブな授業づくり

2.1. で述べた読む力を育てる授業は、ともすれば和訳一辺倒になり、一見「コミュニケーションな授業」とは相反するもののようと思われる。しかしこれら二者が授業で共存できないというわけではない。

そもそも授業内で見られるコミュニケーションとは何だろうか。教師から生徒への問いかけはその代表例と言えるだろう。ただし、50分間ひたすら教師が指揮をとり続ける形式は「コミュニケーション英語」の求めるところではない。講義タイプの授業に比べ、Student-Centredの授業では生徒は学習内容をより多く保持する傾向があると言われる。その試みのひとつとして、教師—生徒間に加えて、生徒—生徒でのコミュニケーションを促す活動を多く取り入れるよう心がける。どのような場面において生徒間のコミュニケーションが可能か、またその効果としてどのようなものが考えられるのだろうか。

3. 実践

3.1. リーディング

3.1.1. 教科書を使って

高校1年生の3つのクラスにおいて、2レッスンに渡り以下のような授業手順を取った。

- ① True or False の答えを全体を読む前に推測する。
- ② TF の答えを確かめながら part1 ~ 4 を通して読む。

- ③分からない単語や表現に下線を引く。
- ④周りの友達と見合わせて、下線の箇所が一致している単語の意味を推測、または教え合う。
- ⑤知らない単語の意味確認は家庭学習として各自行う。

Genius English Communication I Lesson 8における各自の未知語の数を数えさせ、その数を書かせた。そのプリントは一度回収し、未知語の平均数を調べたところ、18語だった。文章全体の語数は807語。このことから、未知語の数は比較的少なく、生徒の理解度は高いということが推測できる。

また、プリントを回収することによって多くの生徒が下線を引いた箇所を、授業を始める前に教師が知ることができる。そうすることによって注意して教えるべきポイントが見えてくるため、より効果的な授業作りにつながる。

また、毎時間、4分間を黙読の時間に充てた。これにはパートごとではなく一つのレッスン全体を印刷したプリントを使用する。分からない単語があっても辞書を使わず、さらに書き込みもせずになるべく速く読む。4分経ったら読み終えた箇所に印をつけ、そこに日付を書く。1時間目は分からない単語が多く、なかなか読めなかった文が2時間目にはより理解できるようになっている。回数を重ねるごとに、印の位置が先へと伸びて行く。段々と分かる単語が増え、読むスピードが速くなることを生徒自身が実感できるようになる。

3.1.2 教科書以外で未知語の意味を推測する

教科書以外に Little Red Riding Hood という物語を読ませた。内容は生徒にもよく知られている「赤ずきん」の話だが、使われている語彙や表現は教科書よりも難しいものが多い。総語数は667語。書き言葉でしか使われない表現もある。

予習はさせず、授業内で十分に読む時間を与えた。その際、分からない語に線を引くという指示を出した。その後、4.5人でグループを作り、下線が一致している単語を抜き出し、意味を推測して別の用紙に書き出す。さらに文脈から予想されるその語の意味も書かせた。

これを回収し、ひとつにまとめてみたところ、多くの語については文脈からその意味を推測することができていたことが分かった(資料1)。

3.2 コミュニケーションを取り入れる

生徒—教師では主にQ&Aを通じてコミュニケーションが見られるが、より多くの生徒に関わらせることのできるペアでの活動が効果的である。コミュニケーションに関しては以下の点に留意して授業を行った。

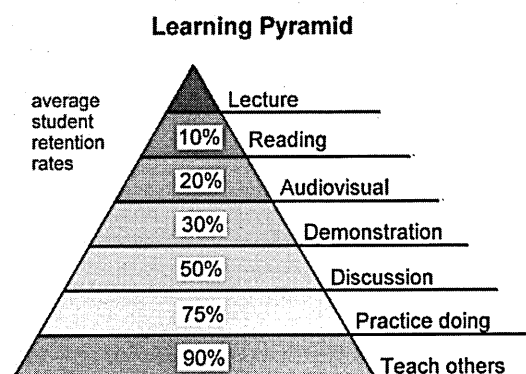
- ・ Warm-up として授業の始めにスピーキングの活動を取り入れる。例：週末のできごとなどの簡単なできごとについて話したり、ゲームをしたりする。
- ・ 新出語はペアで練習をする。一方が言った日本語をもう一方が英語に直す。復習として全体の単語を教師—生徒でリピート練習した後で、生徒どうしで行う。2分間程度。3～5語ずつ。
- ・ 教科書の内容に関するQ&Aは生徒—教師間で終わらせず、確認後にあらためて生徒どうしでQ&Aを行う。

このように、単純ではあるがペアでの活動は簡単に取り入れやすく、全体の前で1人が話す形式に比べると生徒にとっての心理的な負担も少ない。

上記に加え、グループを作り、担当箇所を決めて1時間の準備の後に英語でプレゼンテーションをするという形式の授業を実施した。レッスンのトピック内容によるが、細かい文法事項や文の構造の解説以外を生徒が生徒に教える。内容をより深く読み込み、良く知る者が、文章を表面上読んだだけの他者に分かりやすく伝える。プレゼンテーションに「やりとり」は少ないが、ポイントをしばって、受け入れられる発音と文法を使って言いたいことを伝えるという行為はコミュニケーションの基本だと言える。audienceの生徒たちは、仲間のプレゼンテーションに対してコメントを書く。

Edger Dale (1946) の Learning Pyramid (図3)によると、人がもっとも情報を保持できる学習スタイルは、他人にそれを教えるという行為である。当然ながら、教えるのに十分な程度によく内容を理解をしている必要があり、さらにその内容を自分の言葉で表現するため思考はより整理される。一方で、講義を受けているだけの場合は保持率がもっとも低く、わずか5%と言われる。これは生徒がほとんど passive な姿勢でいるためである。授業では生徒が学習者として active である時間なるべく増やすように心がける。例えば教師が一方的に話し続ける時間を減らす。(5分間以上連続して話し続けないようにする。)

(図 3)



4. 考察

4.1 リーディング・プロセスを信じる

今回の実践により、以下のことが明らかになった。

- ・生徒は未知語のおおよその意味を予測できている。
- ・リーディング・テキストに目を通すたびに分からない語の数は減り、読むスピードは早くなっている。

手取り足取り、オーラル・イントロダクションなどを用いて指導をすることはすべての場合で効果的であるとは言えず、場合によっては過剰な補助になりかねない。教師として、生徒が自力でテキストを読めているのかどうかの不安はありながらも、生徒のリーディング・プロセスをより信頼するべきである。

また、より多くの様々な種類の文章に触れる機会を増やすことで生徒は自信をつける。分からない単語があっても、全体を読み通そうとする勇氣と度胸は、多くの文章に触れることで養われる。そのためには、一つのテキストに長時間をかけて細かく読むよりはむしろ読む量を増やす方が効果的である。

予習として単語の意味調べ、本文書き写し、和訳等に時間をかけることが日本の中・高における英語学習では、長年の間多数派を占めているようだが、例えば、テキストは書き写さず、単語の意味を先に与えてしまうことも可能である。そうすることによって、単語を調べていた時間を、読むこと自体に費やすことができる。授業では、教科書に限らず、そのトピックに関連した新聞記事等の読み物を積極的に扱う時間を確保したい。

ただし、与えるテキストは、語彙、内容等の面において生徒のレベルに応じた適切なものである必要がある。

4.2 コミュニケーション活動

Warm-Up によって日々スピーキング活動を取り入れると、英語を話すことに対する抵抗が減少し、ペアやグループでの活動には積極的な取り組みが見られた。

プレゼンテーションを通じて生徒が生徒に教える取り組みにおいては、ヒントの無い状態から自分自身で何度も読み込む様子が見られた。比較的英語を苦手とする生徒でも、自分の言葉で教科書の内容を一生懸命に説明しようとしていた。

「コミュニケーション」の生まれる条件として以下のようものが考えられる。

- ・ information gap
- ・ opinion gap
- ・ preference gap

共通のリーディング・テキストを中心にした授業において information gap は存在しない。そのため opinion gap や preference gap を利用したり、教師が information gap を作ったりすることが必要となる。どのような場面で、どのようにして gap を作り出すのかの工夫が必要である。上記のプレゼンテーションの例では、あらかじめ生徒が共通の文章全体に目を通しているため、information gap は無いが、ディスカッション等の活動を加えて opinion gap を作り出すことも可能である。

5. 課題

5.1 定期試験

授業内容と定期試験の関連性をより持たせたい。一度読んだ文章のみを扱って出題するだけでは、暗記力を試すだけの試験になってしまう可能性がある。教科書のテキストに加えて、それに関連する話題を扱った未読の文章を扱うと普段のリーディング活動がより生かされ、試されるだろう。

5.2 プレゼンテーションの評価

プレゼンテーションを行った生徒に対する評価基準が曖昧である。活動前に生徒に示す基準（例えば、contents, delivery, visual aids, cohesiveness など）を作成する必要がある。評価は、フィードバックとして生徒に伝える。言いたいことが audience にどのように伝わったかを教師からも還元することで、コミュニケーション活動としてのプレゼンテーションがより意義を持つようになるだろう。

5.3 語彙の強化

教科書の文脈で一度紹介されただけで語彙力をつける

のは困難である。英語の学習において語彙力の強化は多くの生徒の課題でもある。語彙力強化のために生徒が生徒に単語を教える取り組みを実行中である。授業の始めの2分間を使い、1時間に1語を扱う。

参考 URL

大修館書店 英語教科書情報ページ

<http://www.taishukan.co.jp/gcdroom/index.html>

(資料1 “Little Red Riding Hood” における未知語の推測 2014年10月)

| | | | |
|--|---|---|---|
| <input type="checkbox"/> creature | 創造、生物 | <input type="checkbox"/> Oh! ay | オーエウイー |
| <input type="checkbox"/> excessively | とても、たいへん、 めっちゃ、めちゃくちゃ、特別？ 特別に、とても、非常に、(副)強 意、ものすごく、すごく、かなり | <input type="checkbox"/> beyond | ~を超える、次の、 裏、うしろ |
| <input type="checkbox"/> dote(d) | 好き、愛している、 愛していた、愛情をもつ、甘 やかす、溺愛している、ねこか わいがりする、かわいがる、も っと好き、~よりももっと、病 か悪化して、点を打つ、 | <input type="checkbox"/> mill | 地形の名前、建物系、峠、 とりま地形、風車、丘的な、何か の地形、コーヒーミル、谷、川？ |
| <input type="checkbox"/> doted on | 好き | <input type="checkbox"/> farthest | ←far 最上級 |
| <input type="checkbox"/> extremely | 激しく→おてんば、極度に | <input type="checkbox"/> divert(ing) | 夢中になる、てっする、 没頭している、 (身を)かがめる、熱中する |
| <input type="checkbox"/> custard | カスタードクリーム！ | <input type="checkbox"/> nosegays | 香りがく、花冠、 息でかぐ、鼻でつく |
| <input type="checkbox"/> thy | your あなたの、私たちの、 the 的な？ thy grandma (かけ る)、具合、病の状態 | <input type="checkbox"/> counterfeit(ing) | 返事、うらごえ、 まねする |
| <input type="checkbox"/> immediately | すぐに？念入りに？ (set out をシューショク)、 | <input type="checkbox"/> bobbin | ドアノブ、 扉についてるカチャってやる力 ギみたいなもの、 何かしらドアの鍵を開けるもの |
| <input type="checkbox"/> dare(d) | 超~したい、ビビらない、 する、実行する、決して、~しよ うとする | <input type="checkbox"/> latch | ロック、鍵、柵、扉、 ミシン系、ドア |
| <input type="checkbox"/> faggot | ファゴット | <input type="checkbox"/> bobbin … latch | ドアがあくしくみ |
| <input type="checkbox"/> faggot-makers | 狼の皮を使う職人、狩人、 猟師、"faggot"を作る人たち、 人間—猟師系、動物—肉食系 | <input type="checkbox"/> fell upon | すぐに |
| <input type="checkbox"/> wither | ≒where、目的格？ =whether どこに、どっち、whether の文 語？where の古い言い方？ 目的地、何をするのかどうか | <input type="checkbox"/> presently | 少し後 |
| | | <input type="checkbox"/> afterward | 弱っている、ハスキーボイス、 馬みたいなの？ |
| | | <input type="checkbox"/> hoarse | this is の省略 |
| | | <input type="checkbox"/> 'tis | 家具の何か。じゅうたん？ |
| | | <input type="checkbox"/> stool | おまえ |
| | | <input type="checkbox"/> thee | ずるがしこい |
| | | <input type="checkbox"/> wick(ed) | |